

## 第十六章 「在日」朝鮮人作家金鶴泳の沈黙

ひとが発話行為を止めることを「沈黙」と呼んでいいならば、一九八五年一月四日に自殺した在日朝鮮人作家金鶴泳はまぎれもなく自ら「沈黙」を選んだ作家と言っている。金鶴泳は一九六六年のデビュー作「凍える口」に登場する磯貝の口を借りて、磯貝の自殺した母は「おやじに殺された」のだとしているが、その論理をしばらく借りるならば金鶴泳もまた何ものかに「殺され」、沈黙を強いられたことになる。金鶴泳を殺したのは果たして何だったのか。

しかしながら、私はいわゆる「自殺の原因」などに興味があるのではない。ひとをしてこの世を堪え難く、そして生き難くするものは何なのか、それを作りだしているところの今のこの世の「構造」について考えたいまでである。それはむろん一様の説明を拒否するはずだが、一九三八年という厳しい時代に生まれ、日本で生まれたがために「在日」作家と呼ばれた「朝鮮人」金鶴泳という一人の個の場合は、その中心となったのは何だったのかを考えることが本稿のもくろみである。それは、人が生き続けられる条件について考えることにもなるだろう。

### 一、ナショナル・アイデンティティの強制

一九六六年に発表された金鶴泳のデビュー作「凍える口」には、日本人と朝鮮人の両者からのナショナル・アイデンティティの強制が描かれている。

たとえば「凍える口」の主人公催圭植は在日朝鮮人でありながら、「民族」の問題では鬱屈しない青年なのだが、催の下宿の大家は催に「民族的コンプレックスがない」ことを「不思議」なこととして「注意」したりする。それは「朝鮮人はみんな民族的コンプレックスに悩んでいなければならない、といった調子」なのである。それはむろん大家が催という個人が保有する様々なアイデンティティのうち「民族」アイデンティティにおいて催を代表させようとした結果だが、そのことは「民族」以外の存在の仕方を許さないことで催を抑圧している。

しかもそのようなことが小説の外でも実際に行われていたらしいことを金鶴泳は「まなざしの壁」の中で記している。

朝鮮人はすべて日本人に対するコンプレックスに悩んでいなければならない、といったふうな K の書きぶりが、彼には納得できなかった。というより、そのまなざしに苦しめられながらも、まなざしの意味するものに決して符合しない、何か透明な不安定さといったようなものを感じてしまうのである。(「まなざしの壁」、『文芸』、1969・1)

「まなざし」のことが無視されているとの「K」の批判は「コンプレックス」を強制することとして「彼には納得できな」とされるのだが、ここでの「まなざし」とはむしろ「日本人」が「朝鮮人」を「まなざ」すその「まなざし」である。しかし作家である主人公にはその「まなざし」なるものは決して「透明」な前提にはなっていない。

催が「朝鮮人」であることを意識させようとする強制は「日本人」からだけではない。たとえば常に「朝鮮」と「政治」を語るために、催によって「政治的人間」と称される金文基という友人は、「ある人間を認めるか否かはその人間が共産主義者であるか否かによる。そして彼によればすべての朝鮮人は共産主義者でなければならない」とし、「朝鮮人から政治を除いたら何も残らない」と主張する人物である。「政治」にかかわる民族アイデンティティ中心主義は朝鮮人からも要求されていたのである。「あるこーるらんぷ」の父仁舜が子供たちに「朝鮮人だということを絶対に忘れるな」と強調するのはその代表的な例としてあげられよう。

小説の外でも状況が変わらないということでは「朝鮮」側も同じである。

彼の作品を読んだ韓国の複数の旧世代の批判は非難に近かった。「金鶴泳は日本人だね。韓国人ならあんなことをしない」と親に暴力を振るう主人公は小説であっても許し難いという。(中略)申淳一と父となぐり合う行為は「孝」の精神を重んずる韓国人の伝統的価値観への反逆に映ったのである。しかし在日二世として育った金鶴泳には、その伝統的価値観が身につけていなかった。そこには在日二世の弱さと強さがある。それを乗り越えることが大きな課題であることを鶴泳は自覚していたが、行き詰まった。父を乗り越えなければ、アイデンティティの確立は不可能であることを強く自覚していたが、挫折した。(金両基「アイデンティティの確立と自死に惑った金鶴泳」、『言語文化』17、2000・3)

「彼の作品を読んだ韓国の複数の旧世代」が、小説の登場人物が朝鮮人にはあるまじき行動をとったという理由で「非難」していたと言いながら、この文章を書いている金両基もまた、金鶴泳に「孝の精神を重んずる韓国人の伝統的価値観」が「身についていなかった」として難じている点では基本的な立場は同じと言うべきだろう。「父」を「乗り越える」ことが一体どういうことなのか不明確だが、いずれにしろ何ものかを「乗り越える」べきだとするこのような考えこそが金鶴泳を「行き詰ま」ったとし「挫折」したと断定させていることは確かである。そして、二〇〇〇年にしてもなお残っているこのような考えこそが金鶴泳を生前に抑圧しつづけたものだと私は考える。

「日本人」と「朝鮮人」がともに金に民族的「アイデンティティ」を「身につ」けることを要求し強制していたことを、次の文章などは象徴的に示している。

彼は、「凍える口」の中の、在日朝鮮人問題を扱った部分が気になるらしかった。朝鮮人とはいえ、日本語で書いて発表する以上、読むのは同胞というよりはほとんど日本人である、つまり、朝鮮人問題に無関心な、それどころか朝鮮人というものに偏見さえ抱いている日本人に向かって発表する以上、もっと面白いものでなくてはならない、そういったところが彼の意見のようだった。つまり、小説を書くのはいいが、朝鮮人問題など書くな、彼はそういいたいらしいのである。(中略)活字にして雑誌に発表する前にいろいろと手を加えたが、在日朝鮮人問題のことを書いたこの部分は削った方がよいでしょうか、と私が当時の杉山正樹編集長にいうと、杉山編集長は、それでは肝心な部分が抜け落ちてしまう、そういうのだった。(「凍える口のこと」、「文芸」、1982・12)

最初の「彼」とは「私より二つ歳上の親戚の同胞」である。「彼」が朝鮮人作家に対して朝鮮のことを書くなと言っているのは、なにもそのこと自体が「面白くない」からではない。「朝鮮人問題」といえども「凍える口」は被害を訴えているわけではなく、むしろ「朝鮮人問題」なるものに積極的に入り込めない青年が描かれるいるだけなのだ。おそらく、同じ在日の「彼」がそのような注文をしたのは、そこに<そうあるべき>、あるいは<見せたい>「朝鮮」像がなかったからなのだろう。<正しい>朝鮮像でない限り、「朝鮮」は扱われてはならなかったのである。一見政治的問題からの自由を説いているように見えるこの言葉はむしろ<正しい>「朝鮮人」作家であることを強制するものである。

また、日本人「編集長」の「肝心」発言からは、全体としては政治的な「朝鮮人問題」の話が中心になってはいないことからすると、この編集者には「朝鮮人」の中の微妙な感情の揺れ動きと軋轢をのぞき見ることこそが重要だったことが見えてくる。

このように、日韓はともに、金鶴泳に対してあくまでも「朝鮮人」作家として存在することを要求していた。「民族」としてのアイデンティティを最優先する作家であることを強制することで、それぞれ読みたくないところは排除し読みたいところを強制することで互いの欲望を補完し合っていたのである。

「凍える口」の中の催は、そのようなナショナル・アイデンティティの強制に「電車のなかの学習」を通してかろうじて応えている。

とかく忘れがちな自分の中の朝鮮人を、その電車のなかの学習によって、すこしでも回復している、あるいは回復しようとしている、そういえるかもしれない。いや回復という言葉は正確ではないだろう。回復とは、過去にあったものを取り戻すことだ。ぼくにおける朝鮮人意識は、もともと自分にながったものを目覚めさせ、育成させることから、回復するというよりは、むしろ、覚醒させる、あるいは獲得する、というべきであろう。

ぼくは自分の中に眠っている朝鮮人を覚醒させ、あるいは獲得し、自分が朝鮮人であって日本人ではないことを、いくら自分が日本人のようなつらをし、日本人と同じような気持ちで生きていても、しかし決して日本人ではないのだということを自覚するために、学習する。（「凍える口」）

教育こそがアイデンティティ形成の中核となることを考えるなら「日本で生まれ、そして幼稚園から大学まで、ずっと日本のそれを通してきた」一人の青年が「朝鮮のことに疎く、また、民族意識も希薄」なのはむしろ当然とすべきだろう。しかし「日本」という名の共同体から拒否され、「朝鮮」というアイデンティティを身につけて「朝鮮」という名の共同体の一員になるための「学習」をしている催は、そのことを「ひどく億劫」で「憂鬱」なことだとしている。「凍える口」があまたの自発的主体形成の物語 忘れられていた民族意識に目覚めるといった に陥らない所以でもあるのだが、いずれにしるナショナル・アイデンティティというものが「獲得」されるものでしかないことに催が気づいていることはもっと注目されていい。

また催はそのように「朝鮮人」として生きることを強制するナショナリズム教育 朝鮮人がいかに他国から苦しめられてきたかを学習する によって「朝鮮人を迫害し、自己のエゴイズムのために朝鮮を利用し、搾取する者たちに対する憤りの心を煽られる」としながらナショナリズムなるものに懐疑の目を向けている。

この憎悪心、この憤りの心、つまりある民族に対する敵対意識、これが朝鮮人であるという民族意識なのであろうか、と。だとしたら、それは、自己のエゴイズムを他者に対する憎悪心に転嫁させているにすぎず、他者のエゴイズムを憎悪することによって自己のエゴイズムを露呈しているにすぎないのではないか。（「凍える口」）

「朝鮮人としての民族意識」が「常に、日本やアメリカに対する憎悪という形で意識され」たのは、何も「在日」の人々に限ることではない。それは朝鮮半島においても常にそうであったのだし、あらゆる（民族）対立は最終的には「憎悪」心を要求するだろう。逆にいえば、憎悪なしには深刻な対立は成立しないはずである。いずれにしろ、そのことが「自分の子が他人の子に苛められたときに感じるであろう怒り、それと同類のもの」だとしたら、それは「本能」にすぎず、それを「仰々しく民族意識、あるいは愛国心といって喧伝するのは、排他心を強調することにほかなら」ないとして、催は怒りと優越意識と憎悪としてのナショナリズムに対して「ひどく空しい」気持ちをいってしまうのである。

当然ながら、彼にとってより重要なのは韓日会談糾弾大会へ出て「対日屈辱外交反対！」を叫ぶことよりは「吃音駆逐！」を叫ぶことである。そして、「自分の小さな苦痛に囚われるのは詰まらないことだ、もっと大きなものに目を向けなくちゃ」と諭す友人に「虫歯の痛みを詰まらない痛みだといって済ませるだろうか？」と彼は抗議する。そして作家金鶴泳は以後、「虫歯の痛み」にこだわりつづけることになる。

とはいえ、自らを「朝鮮人」としてのみそのあり方を認めようとするナショナル・アイデンティティの強制に抵抗を覚えていた金鶴泳の主人公たちも、電車の中の日本人を「日本人の顔」以前の「人間の顔」と見ることはできない（「遊離層」）。彼らは、「日本人」ではないことの自覚があくまでも「学習」をとおして「獲得」されたものであることに気づきながらも、「俺は日本人ではない」し「よそ者」であるという認識から自由ではなく、「他人の家にいるような窮屈な気持ち」に陥らざるを得なかった。そういう意味で彼らは、ナショナル・アイデンティティの強制に打ち勝つことは出来なかったのである。そ

して、金鶴泳の悲劇はまさにそこから始まったと言っていい。

金鶴泳が書きつづけたのは「私」というアイデンティティにこだわりつづけた、文字通りの意味での「私」小説だった。しかしそこで書かれるのは「私」を語るものとされる「私小説」において、ナショナル・アイデンティティに距離をおいた「私」として存在することがいかに不自由だったのかということである（注1）。金鶴泳は「個」としての「私」を語ろうとしたが、そこでは「私」であるままの「私」を語ることは禁じられていたのである。

むしろ、ナショナル・アイデンティティからまったく自由な「私」や「個」がありうると言っているのではない。後述するが、金鶴泳の書いたものは「個」の「虫歯の痛み」にこだわっているようで、その「痛み」の原因を様々の層で探ろうとしたものだったし、結果として十二分に「民族」問題を語っていたが、金の同時代においてはそのようなあり方は許されなかったのである。そこでは、「個」はまず様々の要素で成り立っているはずの自己のアイデンティティのうち何よりもナショナル・アイデンティティを優先させ、「民族」のなかに存在していなければならなかった。そしてそのことは、別のあり方にこだわろうとした金鶴泳を抑圧していたのである。

## 二、「沈黙」の暴力

人がナショナル・アイデンティティにこだわるのは、まずはそのことの確認が自己の所属すべき共同体の確認につながるからである。そして自分の「帰属」すべき場所を新たに確認させるものとして結婚と就職がある。金鶴泳の小説の多くにおいて結婚や就職が取り上げられるのは、それが「日本」という共同体への実質的な参入の可能性を測るものだからである。多くの場合その試みは挫折に終わるのだが、その時特徴的なのはその拒否の主体が、「朝鮮」にかかわる相手の属性に関して決して口にしないということである。

不思議なのは、知っていながら、「朝鮮」とか「朝鮮人」という言葉が、一度も文子の口から漏れなかったということだ。彼も言わなかった。（中略）それを確認する言葉はどちらの口からも漏れなかったのだった。（「遊離層」）

「それ」に触れないこの恋人たちは別れることになる。そして、同様のパターンが金鶴

泳の小説においては少なからず見られる。

たとえば「土の悲しみ」においても「ぼく」に好感を持っていたと見える女性は「それ」に触れない。本当は「李」という名前であることを知っているのに「松村さんとばかり呼び、李さんと呼んだことは一度もない」のである。むしろ「朝鮮人であることが話題になったということも、一度も」ない。そして、金鶴泳の小説ではそのことに触れなかった恋人たちはほとんどいいほど、別れることになる。

それはむしろ、そこにおいて<触れない>ことが、相手の属性を<劣性>とすることだったからにほかならない。つまり、触れてもらえないまさにそのことによって、相手は自己の属性を<劣性>として確認しなければならないのである。「それ」自体が劣性なのではない。<触れない>こと、禁忌とすることこそが「それ」を<劣性>とするのである。言葉として発話されなくとも、そこでは沈黙が<劣性>を語っていて、登場人物たちの関係の成立を妨害するのである。そこでの沈黙は一般に考えられているように思いやりなどではなく、暴力だったのである。

当然ながら「それ」に触れている場合は大体において関係が成立する。

それ以上に印象に残ったのは、彼がぼくのことをずばりと「朝鮮人なんだね」といつてのけたことだった。奇妙なことだが、それまで、日本人からそのようにいわれたことは、一度もなかった。多くの日本人に接してきたが、みな、「朝鮮の方なんですね」「国籍は朝鮮なんですね」あるいは、せいぜい、「三国人なんだね」というふうないい方をするものばかりで、磯貝のように、「朝鮮人なんだね」とはっきりいったものには出会ったことがなかった。

「朝鮮の方なんですね」 - どこか丁寧な感じのそのようないい方を耳にするとき、ぼくはそれが、実は朝鮮人に対するある種の感情、すなわち蔑視感を裏返しにした表現だということを知っていた。だから、磯貝が「朝鮮人なんだね」と無造作にいったとき、ぼくはかえって、彼は普通の日本人のような、朝鮮人に対する特殊な感情は、持ち合わせていないのかも知れない、と思ったものだった。（「凍える口」）

そして禁忌としての「それ」に触れた磯貝と催は以後急速に親しい仲となり、催は磯貝の遺書を委託される唯一の相手となるのである。

『金鶴泳作品集』(作品社、1986・1)には末尾に数人の人が金鶴泳について書い

ているのだが、その中では李ウファンのみが金鶴泳の「吃音」の状況を再現している。むしろ、それは金鶴泳が「吃音」であることを差別してのことではない。李が「それ」に触れているのは李において「吃音」として認識されてはいなかったことを示すものであり、そのことで<劣性>としての「吃音」から金鶴泳を自由にしているのである。

触れないこと、「それ」の前で沈黙することは、沈黙するあまたの匿名性の中に自らの身を沈めることだ。「凍える口」の催が「個」の顔を持った人たちの前ではどもることがないのに、「大勢の人々の前」だとどもってしまう理由はそこにある。匿名性の中に沈潜することは「個」の顔を見えなくする。そこにあるのは「集団」としての顔でしかないのである。個々の沈黙が「恐怖」(「凍える口」)と感じられてしまうのはそのためだ。たとえそこに一個人がいようともしその個人が沈黙する瞬間、人は劣性を帯びさせられ、相手の背後に無数の「沈黙」の集団を感じ取るだろう。沈黙は実は言葉の不在なのではなく、聞こえないが何よりも強力な排除の言葉なのである。沈黙が人を「緊張」させ、「恐怖」に陥れるのはそのためにほかならない。「吃音」の主人公がみんなの前で言葉につかえてしまったときの場面をみよう。

つかえつかえ話しながら、ぼくは自分の聞き苦しい話を聞いている皆の心中を思った。ある者はじっとぼくの方を見つめ、ある者は見るに堪えないというように、顔をうつむけているのを目の隅で感じた。

<ああ、なんてまあひどく吃ってるんだろう>

<なんてまあ、だめなんだろう>

そう思っているであろう皆の心中を思うと、ぼくの身体はさらに火照り、吃音はさらにひどいものになっていくのだった。(「凍える口」)

この場面で自意識過剰を見ることはたやすい。だとしても、沈黙する「皆の心中」こそがさらなる抑圧となっていることは確認しておくべきだ。そして実はこのような催自身も磯貝の吃音に触れないことで<匿名の沈黙>に加担していたのである。催は磯貝の前では「吃りは磯貝であって自分は吃りではないという安堵感のために、恐怖感を忘れ」「吃ることなく自己紹介を済ませられ」るのだし、「磯貝と話すときはいつも、少しも吃らな」い。そして最後まで二人の間で「吃音」に関する会話が交わされることはなかった。

磯貝を殺したのは催の沈黙だったと言っていい。催は磯貝の前で正常人のふりをするこ

とで磯貝を抑圧し、そのことであらうじて少しばかり強者となり得たのである。

それは、磯貝が催の「朝鮮」人であることに＜触れる＞ことで関係が成立しえたことを裏切ることである。吃音であり、朝鮮人である二つの＜劣性＞を持ち合わせることで本来ならば磯貝より弱者の位置に立たされていたはずの催が、「それ」に触れないだけで強者抑圧者となっていたのである。それは被抑圧者もまた抑圧者となる構造を示している。

それにしても、「朝鮮」の表象となっている「名前」とは何だろうか。

「空白の人」では、大学は朝鮮人の主人公に本名である「金」を使うことを要求するの  
に、下宿の人々は部屋の名札に両方を書いておいたにもかかわらず日本名「秋山」と呼ん  
でいる。彼は大学の要求に抵抗を覚えるのだが、そのような「秋山と名乗りたい心理」＝  
「日本人と見て貰いたい」気持ちを大学という「国家」が抑圧するのは当然と言うべきだ  
ろう。「金」という本名を名乗らせることこそ、朝鮮人青年を「朝鮮人」として有徴化する  
第一歩なのだし、近代国民国家（東大に限らず、教育機関は「国家」に代わる空間である  
はずだ）「日本」としては絶えず有徴化の対象を見つけねばならないのである。その対象が  
まず「国籍」の違うものだったのも当然だ。むろんそれはその対象が常に「朝鮮人」であ  
ることを忘れないようにし、彼の周りの日本人たちに自己の日本人たることを改めて認識  
させるだろう。下宿の人達が「秋山」と呼ぶのは、周りにいる「他者」の存在を、意識に  
上らせたくなかったためのことである。

しかし、その人の何者たるかを決めるのは「名前」なのか？

名前は、その個人が帰属すべき共同体を示すものだが、同時に個人がその共同体に「所  
有」されている 国家への様々な義務条項が設けられているのはそのことにほかならな  
い ことを示してもいて、それ以外の何物でもない。それは時に、その人が駆使する「言  
葉」さえも表せないのだ。名前と言語はその人のナショナル・アイデンティティを証明す  
るもっとも基本的な条件と理解されてきたはずだが、「李」が「日本語」を母語としている  
現実さえも、「名前」は隠蔽して記さない。「遊離層」において主人公は、付き合っていた  
女性に「(生まれてくる子供が)混血児だということがかわいそう」という言葉を別れの言  
葉として告げられる。「混血児はそれだけですすでに一つの不幸」というのである。「混血児」  
の存在は確かに「純血」思想によってささえられるべき単一民族神話を破壊する存在であ  
り、朝鮮人の「不潔」(金城一紀『GO』、講談社、2000・3)を想像することでその  
ような拒否の妥当性は保証されるだろう。しかし、帰化した朝鮮人のことを除くとしても、  
いわゆる「朝鮮」民族が「日本」民族と隣り合っていた半世紀以上の歳月の間に、有形無

形の「混血」は言うまでもなく進行していた。

しかし日本における「名前」に関する制度はそのことを隠蔽する。金鶴泳のテキストは、共通する響きの「名前」を確認しあうことで秩序を保ってきた共同体の中において、語ること、<触れる>ことこそがその秩序を攪乱し「個」を救い得ることを語っている。

むしろ、語ることや触れることが逆に暴力になることもあるだろう。問題は様式ではなくその様式に何が込められているかのはずだが、少なくとも「在日」に対する日本人の接触の仕方は、日常的には「沈黙」の形が圧倒的に多かったことを確めておきたい。むしろそれは、ある瞬間、「言葉」や「行為」の暴力となって姿を現わすだろう。

### 三、「在日」という場所

「鑿」に登場する青年は大学を出たあと「朝鮮人で、しかも簡単な返事にも難儀する吃りの自分に生きられる場所はあるのか」といぶかしむ。その「生きられる場所」の剥奪感、まずは北朝鮮帰還の模様を見ながら労務者風の中年男が吐き出す「帰れ。朝鮮人はさっさと朝鮮へ帰れ」(「遊離層」)という言葉によって味わわせられるような、国土空間をめぐってのものとなっているが、それはなにも「国土」の問題に限るわけではない。

同僚たちは、折にふれて、雑談を交わす。だが、ぼくはどうしても、その中に加われないのだ。じっさい、ぼくは滅多に口を利かない。利かないのではなく、利けないのである。とって、むしろ、ぼくは唾ではない。ドモリだが、口を利くことは利くのである。だが、なぜか、研究室のあの空気に入ると、ぼくは口が利けなくなってしまう。(中略)

ある雰囲気の中にあるとき、ぼくは、吃音者は、ほとんどものを言うことができなくなる。声を出そうと思っても、声の方が出てくれないのである。(中略)話しの相手により、時と場所により、また、そのときの自分の心身状態の微妙なちがいによって、種々様々な吃音の症状を呈する。(「凍える口」)

大学の実験室という「日本」での公共の場に「現れ」(注2)ることの出来ない一人の個がここにはいる。彼をして口籠もらせる「ある雰囲気」というものが、他者が自分を自由に表せる空間としての「公共圏」(注3)をとりあげてしまっているのである。したがって

それは「声」を発することを不自由にさせている。

居場所があるということは、そこに自己の「現れ」を受け入れる公共圏があるということだ。そして発話 声を出していい「場所」を得ることでもある。声を出すこと 言葉を発することこそはその個の「存在」を証明するものとなるだろう。「凍える口」において催が行う発声練習は彼にとっての「自己の解放の運動」(注4)にほかならないが、そこから見えてくるのは、語りうる場所こそが人が生きられる条件となるということである。

日本が「日本」と名づけられた領土(注5)にいることになった朝鮮人たちを「在日」と呼んだのは、彼らがたとえ「日本」に身をおいていてもそれは彼らの「居場所」ではないのだということを示すものである。「在日」とは、絶えず、故郷ではない「日本」に「在」るのだということ意識させずにはおかない暴力的な言葉なのである。むろんそのような「在日」の主体化は「日本」の主体化につながるだろう。先に見たように朝鮮は自らの権力化を、日本は他者の排除を目指して、それぞれ「在日」から居場所をとりあげていたのである。

一九六五年の日韓協定は日本に、その間忘れていてよかった加害者としての自己を新たに認識させるきっかけとなったはずである。それまでの「在日文学」が「在日」として認識されなかったとすれば、それは彼らを「他者」として認識すべききっかけがなかったからであろう。しかし一九六四年の東京オリンピックを経ていよいよ「戦後」を抜け出したかのような日本は、一九七〇年の大阪万国博覧会のような世界を相手とする行事を前に、自らの内部に存在する異物感に名前を与えることで彼らが実は「他者」であったことを確認しておかなければならなかったのである。李孝徳は「在日文学」の歴史化が一九七〇年前後に行われたと指摘(注6)しているが、重要な指摘と言わねばならない。

しかし、一人の個がその「場所」に帰属すべき権利は一体何によるべきものなのだろうか。たとえばその空間を一つの社会として成り立たせるもっとも基本的な条件のはずの「言語」はその権利のひとつの条件になりえないのか？あるいはその土地を慈しんだ時間の長さはその領土の名を自己のものとして分け持つ条件とならないのか？

とはいえ、金鶴泳をして決定的な沈黙へと追いこんだのは居場所を持たないための疎外感を「弱さ」ゆえのものと考えたことだったと私は考える。つまり、抑圧の前でくじけている存在を「弱い」とし、そのような存在がこの世の中でなお生きていくことを認めることが、彼には出来なかったのである。「遊離層」の夢の場面で注意燈の「蒼い炎」の「みるからに弱弱しい炎に忌々しく、微かな怒りを感じ」炎を消すことは「死ぬ」ことと知りなが

ら「炎を消したいと思った」とするのはその一つの証左と見ていいはずだ。

しかし、居場所が得られないことに対する疎外感ゆえの鬱屈を「弱い」ゆえのものとすることはできない。「弱い」ということはあくまでも、権力化・主体化闘争で周縁化されたものの表象にすぎないはずだ。そして「強い」ことへの志向は何よりも国家の志向であったことを、金鶴泳のテキストもまた記している。

ヒトウツ！我等は皇国臣民なり、忠誠以て君国に報ゼン！

ヒトウツ！我等皇国臣民は互いに信愛協力し、以て団結を固くセン！

ヒトウツ！我等皇国臣民は忍苦鍛錬を養い、以って皇道を宣揚セン！

(「あるこーるらんぷ」)

坑夫生活を強いられた父の回想に出てくる「忍苦鍛錬」とはその強さへの国家的志向を語る代表的言葉と言っていいだろう。このような提唱を「途中でつかえたりすると、ひでえ目に合わされる、そんな根性だから成績上がらんのだとかいって、半殺しにされ」と記されるのだが、「根性」という合言葉が強者主義を助長するものであることは言うまでもない。

実際、金鶴泳のテキストでは人生は常に「勝負中」であり「闘争」(「凍える口」)と認識されている。そして、その主人公たちは居場所を得られなかったための鬱屈を「弱さ」ゆえのこととみなし、「弱い」自らを生きるに値しないものとして差別していた。

祖母も心の弱い人間ではなかったのだろうか。そのためにあんな死に方をしたのではないだろうか。近年ますます祖母に親近感をおぼえるようになっているのは、ぼくが心の弱い人間で、弱いもの同士の共鳴を感じているからでしょうか(「土の悲しみ」)

金鶴泳のテキストのなかの「心の弱い」ひとたちに自ら命を絶つ人が多いのはまさにこのような認識ゆえのことだったと言えるだろう。

とはいえ、そのような人物を配置し、自らも自殺してしまった金鶴泳を指して語られた、「金鶴泳の魂は、この世に生きるのにふさはしくないところがもともとあつた」(注7)とする発言は暴力以外の何ものでもない。先に述べたように「弱い」とはあくまでも様々の力の暗闘の結果の表象にすぎない。しかし、金鶴泳に「生きるのにふさわしくない」とこ

ろが「もともと」存在したとする言葉は、そのような表象をさらに作りつづけるだろう。映画『日本鬼子』(2001年公開、監督・松井稔)においては「強い」男への幻想が人を残酷にしまうことが語られているが、「根性がない」「意気地なし」などのののしりの言葉や「男」「軍人」「日本」共同体の参入への欲望のみが問題なのではない。そのことのむなしさが分かっていた兵隊たちさえも、「強く」なろうとして残酷な『日本鬼子』に変貌してしまったことはもっと認識されていいはずだ。たとえば共同体の要求に合わせられないことを「弱い」とするなら、むしろ弱さこそが志向されるべきであろう。

#### 四、存在の条件

愛とは想う、ことだとぼくは思うのです。人なりものを想う、想う心が、思いやりとなり、労りや慈しみとなり、広くいえば他者の存在を尊重する、ということになるのではないのでしょうか。愛が欠けている、想う心が欠けている。それがこの世のあらゆる不幸の根源のようにぼくには思われるのです。(「土の悲しみ」)

ここでは「この世のあらゆる不幸の根源」は人の「存在」が「尊重」されないことにあるとし、続いてその代表的な人物として「祖母」のことが語られる。その祖母は自殺し、死後も「遺影どころか、遺骨さえ行方不明」というような「無」の存在になっている。「遺影」や「遺骨」が文字とおり「遺された」ものとしてその人を<記憶>するためのものならば、それに関する「無」とは、その人がこの世に「存在」していたことまでもが忘却されるということにほかならない。日本へ流れてきて「工員」として働いていたという祖母の経歴は一人の植民地の女としての不幸な経験にほかならず、そのことへの<記憶>こそが<歴史>のきっかけとなり得ることを考えるならば、祖母の苦難は「無」とされることで歴史の忘却を導いていたのだと言えるだろう。

李は「祖母」の死を「民族の運命と深く結びついている人間の運命」とするのだが、祖母の死はむしろ「民族」の悲しみだけでなく「女」の悲しみも貧しい「階層」の悲しみも同時に語っている。金鶴泳のテクストは「「女」たちへの抑圧を隠し持つてる」(注8)と言えなくもないが、その一方で「祖母」のような存在を描くことで忘却された女たちの「声」の復元に努めている。たとえ「声」なき「声」ではあっても、それはディアスポラとしての植民地の女の強制された沈黙に、「声」を与えているのである。

それにしても、金を「在日」の「朝鮮人」作家と規定し得るものは果たして何だろうか。

「凍える口」の磯貝がみずから「俺の寂しさのために死ぬ」といって、漱石の『心』の「先生」のように「寂しくて死んだ」かと思うと、「遊離層」の「貴春」は、「ぼんやりとした不安のために自殺したのにちがいない」と残った者たちにみなされる。志賀直哉に学び、漱石や芥川の小説の人物たちにきわめて近い人物を登場させていたこの個の感性を「朝鮮」のものと呼びうるのだろうか。そもそも「日本」のものとする「私小説」を書きつづけた点だけでも金の感性と資質は「朝鮮」よりは「日本」に近い。自殺をした作家が「朝鮮」にあまり存在しないことにおいても、自殺をした金鶴泳はむしろ「日本的」と言うべきだろう。

しかしそのような金鶴泳を「在日」「朝鮮人」作家と囲い込もうとする言説は絶えない。

彼は、しかし、父親の不機嫌の背景と由来を、小説的造形の重要な要素としなかった。あたかも父親の不機嫌を個人的資質によるものであるかのごとく描き、そこに一篇の告発文学を造形することを避けたのである。

彼の吃音と人生にたいするある根源的な悲哀感情も、夕焼けの空やバッハの口短調管弦楽のメロディに封じ込めた。大儀名分やイデオロギイに、自分の思考の繫留地点の一つを求めることを頑なに拒否したのは、金鶴泳の含羞だった。(中略)

彼が日本人であつたなら、小生の哀悼はそれに尽きるのである。しかし彼は韓国人である。彼は日本に生まれ、日本に育つたが、彼の含羞と感傷には、近代の日本人がその文明的変質によって支配された感受性とは異なる、彼の父祖たちの魂の驕りを小生は感じる。(桶谷秀昭「金鶴泳の死に想ふ」、『金鶴泳作品集』付録、作品社、1986・1)

桶谷は金鶴泳に「含羞」とともに「感傷」があるとしながら「日本人の文学が近代においてそれを急速に失ってきた理由」は「わが国のインテリゲンチヤ文士における文明意識のせみ」で「われわれはヨロッパ近代普遍文明を尺度とする文学的主題を求めるあまり、いつしか民族の魂から沸く涙を恥じるやうになつたのである」とする。

しかし、「父親の不機嫌の背景と由来」を中心とした「告発文学」を書けとすることは、金の言うところの「政治的」人間になれということにほかならない。そして、金鶴泳が「民族」の問題を書かなかつたとするのはこの筆者の誤読でしかない。さらに、金鶴泳の作品

に「感傷」があるとしながら「日本人」にそれが無いのは「文明意識」によるものだとする言葉は、(朝鮮)「民族」的ものを「文明」の対称的なところに位置付け、「野蛮」なものとする傲慢を露わにしている。

いうならば、「彼の父母たちの魂の翳り」を桶谷は「発見」したかったのであり、そういう意味では李恢成の『砧を打つ女』(文藝春秋、1972・3)における非政治的な、それでいて民族的叙情を漂わす作品が最初の芥川賞をとったのは偶然ではない。「在日文学」はそのような場所においてのみその存在を許されていたのである(注9)。

朝鮮人作家からは「私小説」として批判され、日本人評論家からは「父母たちの魂」を体現することを要求されていた金鶴泳はおそらく仕事のうえでも居場所のない思いをしていたのだろう。ついには「郷愁は終わり、そして我らは」(一九八三)のような限りなく「政治的」な小説をも書いてしまった金鶴泳が、文壇の「黙殺」(注10)の前でいよいよ追い詰められていたとしても不思議はないのである。

金鶴泳を評して「位置の定まらぬ人である。まるで画家が静物を並べるのに苦心してるごとく、金さんは自分の置かれる場所を求めて、こそこそと揺れ動いて移る」とし「この世の何処にも居場所がみつからなかったのだろうか」(注11)とする言葉は金鶴泳の「居場所」に関する思いをもっとも的確に表したのものと見えるだろう。

金鶴泳は、遺作「土の悲しみ」の中で次のように書いている。

当時、ぼくは、日が暮れるとともに自分を襲ってくる、どこからくるとも知れぬ疼きにも似た辛さの感情に苦しめられていました。いや、当時ばかりでなく、物心ついたごろからすでにその感情はぼくを見舞っていたし、これを書いているいまもなお、それはさらに耐えがたいものとなって続いているのです。だからこそこれを書いているのであって、これがぼくにとって書くことの最後の営為なのです。

この手紙は、「李」という名の青年が「あなた」と称される、すでに死んだ女性に向かって書いている、受け取り手のない手紙である。「ぼく」は「物心ついたごろ」から「これを書いているいま」までずっと「疼き」の「感情に苦しめられて」いて「だからこそこれを書いている」のだとしている。「書く」ことは、「疼き」からの解放の手段として試みられていた。ならば、これが「書くことの最後の営為」となるには、書かずにはいられない「疼き」の不在が予想されなければならない。しかし、テキストの中に李の疼きが治癒される

べききっかけは書かれていない。ならば、「疼き」が消えるとは、「疼き」に見まわれるべき身体 生命の消失を示しているということではないか。受け取り手のない手記「土の悲しみ」は、李の遺書だったのである。

それにしても、「李」は「書くこと」を生業にしている人ではない。李は工学徒でしかなく、テキストの中に李がものを「書」いている痕跡はないのである。

ならばなぜここで唐突にも自らの死が「書くことの最後」になることといい得たのか。それは、これを書いている作家金鶴泳の声だったのではないか。つまり李の遺書として書かれたテキスト「土の悲しみ」は、はからずも作家金鶴泳の遺書になっていたのではないか。

金鶴泳は「凍える口」以降、「書く」ことによる自己治癒を試みていた。そのことはエッセイなどでも書いていることでもある。しかし「土の悲しみ」で金鶴泳は「書くこと」＝語ることをやめる。治癒への試みは、ついに自らの「解放」を手にするができなかったのである。

語ることをやめてしまった金鶴泳の沈黙は、ナショナル・アイデンティティの呼びかけに抵抗する、ナショナル・アイデンティティ以外の「個」としての発話を封じられてのものだった。そういう意味で 金鶴泳の自死は、「日本」や「朝鮮」というナショナル・アイデンティティイデオロギの犠牲によるものとわたしは考える。近代以降、朝鮮と日本はお互いを参照しながら自己の姿を画定していったのだが、二十世紀の帝国主義と民族主義の欲望が作り出したそのような「主体」作りこそが、金鶴泳に居場所を与えずに沈黙を選ばせていたのである（注12）。

自分は、自分であるほかないものだ。人はそれぞれ、そのあるがままの状態においてすでに存在理由を得ているはずだ。問題なのはこの自分をどうかすることではなく、こういう自分として、ではどのように生きるのか、どのように世界（外部現実）に関わるのか、ということであるはずだ。（「一匹の羊」）

金鶴泳が「在日の生き難さ」（注13）を描いたとするならば、まさに「こういう自分として」生きることを、「日本」と「韓国」と「朝鮮民主主義人民共和国」のいずれもが許さなかったことにおける「生き難さ」とするべきだ。

とはいえ、蝉を片っ端から「潰し殺」しながら「ぶざまな格好のまま不意に死者の沈黙

に返り、木の枝に貼り付いている」蝉を見て、「憎悪すべき敵を処刑に処したように、一種爽やかな快感」を感じる、金鶴泳のテキストの別の声にも注目しないわけにはいかない。蝉を片っ端から潰し殺したのは「蝉を愛するには蝉の数が多すぎ」たからにすぎず、「醜くてうるさい蝉を退治するのは、皆のためにもなること」(以上「錯迷」との語りは、「醜くてうるさい」存在の「退治」を「皆のためにもなることぐらいにしか思っていな」い二十一世紀の現在の状況をも語っていて慄然とさせる。「死者」の「沈黙」を前になお存在しつづけるだろう「皆」とは誰のことなのだろうか。

#### 注

1) 李順愛は金鶴泳が民族問題を「外側」の問題としたことを批判しながら「民族問題を吃音体験のように語りきれなかったところに作家金鶴泳のジレンマがあった」(『二世の起源と戦後思想』、平凡社、2000・7)とするが、このような批判も「在日」作家は「民族問題」を「語る」ことを当然のこととしているだけでなく、政治的な立場を露わにする形で書くことを要求するものにほかならない。

2) 斎藤純一「表象の政治・現れの政治」、『現代思想』二十五巻八号

3) 「公共圏」の議論に関しては注2の文献、そして斎藤純一『公共性』(岩波書店、2000・5)、斎藤純一と竹村和子の対談「親密圏と公共圏の〈あいだ〉」(『思想』2001・6)に多くを負っている。

4) 下河辺美知子は『歴史とトラウマ』(作品社、2000・3)の中で「呼吸筋、発声筋の活用は、人がこの世に出てきて最初に行う自己の解放の運動である。というならば、発声練習は、トラウマ的出来事から生還した〈死の体験者〉が、まず行なうべきウォーミングアップ」(三十六頁)だとして、「トラウマ」とそれからの「解放」に「発声」「声」を「発」する必要があることを指摘している。

5) 網野善彦『〈日本〉とは何か』(講談社、2000・10)参照。

6) 李孝徳「ポストコロナルの政治と「在日」文学」(『現代思想臨時増刊 総特集 戦後東アジアとアメリカの存在』2001・7)

7) 桶谷秀昭「金鶴泳の死に想ふ」、『金鶴泳作品集』付録(作品社、1986・1)

8) 川村湊『生まれたらそこがふるさと』171頁、(平凡社、1999・9)

9) 李孝徳の指摘とおり(注6)「在日朝鮮人文学」なるジャンルの成立は日本の「一方的な歴史化」だったが、それが同時に「日本」の主体化でもあったことも合わせて指摘して

おきたい。

10) 加藤典洋「石膏の金鶴泳」(『金鶴泳作品集』付録)。そのような「黙殺」の主体としては「日本」だけではなく「北朝鮮」も入れて考えるべきであろう。

たとえば金石範は「郷愁は終わり、我らは」を激しく批判しているが(「座談会 昭和文学史 在日朝鮮人文学」,「すばる」,2001・10) そのような批判が当時において「黙殺」の形として現れていた可能性は高い。

11) 李ウファン「金さん」(『金鶴泳作品集』付録)

12) アイデンティティに関しての執着がいかに無根拠なものであるかを、たとえばジュディス・バトラーはルイ・アルチュセルの呼びかけ理論を援用しながら次のように述べている。

「アイデンティティはこの循環の機能であり、その循環の前に存在するのではない。呼びかけが刻むしるしは(ママ)何かを記述するのではなく、むしろ新しい何かを起動させるのである。それはすでに存在しているのを報告するのではなく、ある現実を導きいれようとするものだ。そしてこれがなされるのは、ひとえに現存する慣習を引用することによってのみである。呼びかけは、その内容が真実でも虚偽でもない発話行為なのである。それ本来の役目は、何かを記述することではない。その目的は、主体が隷属の位置にあることをしめし、その位置に主体を確定することであり、場所と時間の中に主体の社会的輪郭をつくりだすことである。その反復作用の効果は、時の経過のなかでその「位置」を堆積させていくことである。(略)

権力の構造と制度は、その名称が権力に完全にぴったりと一致しているようなものではない。名称は、確定化し、固定化し、輪郭を区切り、実体を与え、つまり実体(個別的な存在)の形而上学を呼びおこすものである(略)名称は、それが阻止しようとする歴史の運動を、その中に抱えているものなのである。(バトラー「触発する言葉」,『思想』1998・10)同)

13) 竹田青嗣『<在日>という根拠』,国文社、1983・1

\* 作品の引用は特記したものの他はすべて『金鶴泳作品集』(作品社、1986・1)による。